



## スクランブルスクラップドストロベリーチンパンジー

---

先輩が走ってくる。  
スクランブル交差点の人ごみをかきわけ、  
俺のところを走ってくる。

「イチゴ、イチゴイチゴ」

俺は緊張する。  
そして身構える。  
いつまで経ってもまったく慣れない。  
イチゴは俺の名前だ。  
先輩付きのカメラマン一号だからイチゴ。

「イチゴ、小さい子来たから。まずはお父さんに声かけるところからな」

先輩は指をさす。  
交差点のすぐ手前に親子がいた。  
三人兄弟だ。  
先輩がしめしたのはいちばん大きな女の子。  
お姉ちゃんだろうな。  
すごくかわいい子だった。  
小学生なのにレザージャケットが超似合っている。  
先輩はこういう子をしっかり見つけてくる。  
センサーでもついてるのか？  
俺はひとりでストリートスナップなんてできる気がしない。  
先輩がついていてくれないと、あと一年はムリだと思う。

「でもまずはちゃんと見てから判断したほうがいいかもな」  
「はい」

俺はうなずく。  
判断するまでもない。  
決まりだ。  
あの子ヤバいよ。  
二時間ここで張っていちばんの当たりだ。  
俺は先輩の目が見られない。  
先輩がいろいろ言ってる。  
先輩の小さなピアスを見ながら返事をする。  
シルバーがもう黒ずんでるピアス。  
でも先輩はすぐ行ってしまう。  
俺も行かなきゃ。  
俺は一眼レフカメラを持ちあげる。  
鬼重い。  
会社のレンズはマジ広角だ。  
こんな立派なカメラ俺には似合わない。

子供が大人向けの服を着てるのとおなじだ。  
俺はそういう子を見るたびに、クソな親に呪いをかけてる。  
俺は信号が変わる前に親子へ近づいていく。  
雑誌名のはいった札をさげているので、説明は簡単だ。  
まあ落ちつけ。  
笑えよ。  
俺は俺に命令する。  
ここに先輩いないからな。

「あの、ストリートスナップを撮っているものなんです」

俺は父親に声をかける。  
クソみたいなゴルフスタイルだ。  
たぶん子供服はママが選んでるんだろう。

「雑誌？」  
「そうです、小学生とか子供向けのファッション誌なんですけど」  
「ああ。ご苦労様だね。それでうちの子がモデルってこと？」

父親はふんぞりかえったような返事をする。  
てめえがエライわけじゃねーけどな。

「どうするエリナ、パパはいいけど撮ってもらおう？」

父親から聞かれ、エリナは俺の目を見る。  
値踏みするような目だ。  
俺はこういうときの子供が怖い。  
すべてを見られている気がする。

あなたは誰なの？  
なぜ写真を撮っているの？  
あなたは誰のことを信じているの？  
あなたはわたしを危ない目にあわせないと約束できる？

俺はその質問に、一つとしてまともに答えられない。  
俺は笑うしかできない。  
怖い。

バカみたいに緊張する。  
ぺらぺらした愛想笑いを浮かべる。  
俺には悪意がない。  
きみの服にしか興味ない。  
なんかこう、それなりに信じてほしい。  
俺はただのカメラマン一号だ。  
先輩は今いないけどすごくいい人なんだ。  
ほんとマジで。

「撮ってもらおう」

エリナはうなずいた。

よかった。

マジでよかった。

俺はカメラのスイッチをオンにする。

指がぶるぶるふるえている。

あとはいつもどおりだ。

型通りのポーズ指示をするだけだ。

露光というこまかい調整があるが、それはすぐ慣れた。

俺はエリナを信号の脇に立たせ、手ぶらの立ちポーズをしてもらおう。

二十枚くらい撮っておけば一枚くらいは当たりがある。

俺はエリナとファインダー越しに会話する。

このコミュニケーションというのが好きじゃない。

「かわいいね何年生？」

「六年」

「マジで？すごい来年中学生じゃん」

「うん」

「どう楽しみじゃない中学生？」

「いじめとかあるらしいから怖い」

「そうなんあっ」

俺の喉からヤバい声が出た。

エリナがサッと目をあげる。

俺はなんでもないよ的に首を振る。

ちがうよ。

キョドったのは君のせいじゃない。

エリナは鼻でためいきをつく。

よかったエリナがバカじゃなくて。

ていうか父親気づけよ適当すぎだろマジで。

俺はカメラをおろしてありがとうを言う。

ほんとありがとう。

父親はエリナの背中をたたいてなんか言いながら交差点を渡っていく。

親子四人は完全に見えなくなり、先輩が戻ってくる。

「イチゴ撮れた？」

「今のところあの子だけですけど」

「いいよ大丈夫。俺も撮ってるから」

先輩は俺のカメラのヒモをぐいっと引っ張る。

「見せて」

俺は先輩と一緒にデジカメ画面を見た。

先輩の金髪はブリーチかけすぎで抜け殻みたいだった。  
インクのようなペンキのようなにおいがする。  
はげたらどうするんだろうか。  
先輩のスキンヘッドか。  
ウケるな。

「もうちょっと空の色トバしてもいいよ」  
「はい」  
「あと、次から親と一緒にカットも撮らせてもらって」  
「親と一緒にの方がいいですか」  
「読者がそういうのほしがるから。俺はいらないと思うけど」

俺はうなづく。  
俺もいらないと思う。  
先輩と俺はたぶん色んなところで趣味が重なる。

「先輩」  
「なに？」  
「アイベスたくないですか？」

クソ噛んだ。

「なにになになに？」  
「アイス食べたくないですか？」  
「アイスいいねー。食べた方がいいね」  
「食べた方がいいですよ絶対」  
「また次の子いたら声かけるよ」  
「俺も見つけます」

先輩はまた人込みに行ってしまうとする。  
先輩が行ってしまうと、俺も人込みの一部になってしまう。  
信号のビービーいう曲とか、俺をチラ見していく横顔の渦とか。  
そういうものに、また、入ってってしまう。

「先輩チンパンジー」

俺は声を出していた。  
とっさすぎてビビった。

「なに？」

先輩もちょっとビクってる。  
ホントに俺が声をかけたのか？

「あの子チンパンジーでしたよ」  
「どういうこと？」

どういふことなんだろう。  
俺だってよくわからない。  
先輩のくちびる荒れてるな。

「ジーンズにチンパンジーのマーク、あれ大人向けっぽかったんですけど」  
「うっそあれリメイクかよ！あとで写真もっかい見させて」  
「はい」

先輩は話に納得した。  
そしてそのまま行ってしまった。  
俺は交差点にある柱みたいなやつにスキニーのケツをのせる。  
黄色信号が十字になってきらきらしている。  
ちょっと目の焦点があってなかった。  
自律神経失調症的なあれか？  
まあちょっと混乱してるだけだろ。  
先輩なんか気づいたかな。  
いや、なんか全般興味なさそうだしな。  
だからいい人なんだよな。  
そうなんだよな。  
ていうかカメラ重いしな。  
俺はカメラからエリナの写真を読み出す。  
拡大ボタンを連打する。  
モザイクみたいにボケたチンパンジーが見えてくる。  
赤信号にどんどん人がたまっている。  
スクランブルってダムみたいですよな。  
俺は先輩とアイスを食べながらそう言うかもしれないな。  
先輩はうなずいてくれるだろう。  
いい人だからな。  
しかもそいつら性欲持ってるってすごくないすか？  
調子こいた俺はそうつづけるかもしれない。  
暴れ出したらやばいな。  
ゾンビよりタチ悪いんじゃね。  
先輩はそんなふうに答えてくれるだろうか。  
もしそうだったらヤバいな。  
俺はすごく安心するだろう。  
きっとさらに調子こいてしまうだろう。  
先輩、さっきのチンパンジーなんですけど。  
あれかさっきの。すごいよね。  
俺の恋人が履いていたのもチンパンジーなんすよね。  
そうなんだ。偶然？すごいじゃん。  
すごいすよね。偶然とかマジビビりますよね。

「いてっ」

えっ。

俺が痛いのか？

確かに重いものがぶつかった気がする。

俺は柱の上でちょっとバランスをくずしてる。

こけそうになったけどなんとかあった。

危なかった。

つか信号青じゃねえか。

俺は立ちあがって髪をこすった。

ワックスのごわごわが手にからむ。

なんだこりゃ。

へんな感じだな。

俺よくわかんねえ。

なんか泣いてる気がする。

クソ。

なんなんだよマジで。

俺こういうのわかんねえんだよ。

どうしたらいいんだろうな。

青信号がまた点滅してる。

俺は本当に泣きはじめている。